協同学習による高校保健科授業へのティームティーチング導入モデルの実践的検討

杉　江　修　治
伊　藤　三　洋
伊　藤　かおり

問　題

21 世紀を契機として，新しい時代に求められる学力の検討がすすめられてきている。学習指導要領の「総則」では，「学校の教育活動を進めるに当たっては，自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに，基礎的，基本的な内容の指導を徹底し，個性を生かす教育の充実に努めなければならない」という表現で学校教育の目標が示されている。また 1996 年に第 15 期中央教育審議会が示した『21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について』では，教育の基本的方向として学校，地域，家庭をあげて子どもたちに「生きる力」を身につけさせるべきことが提言されている。「生きる力」は「これからの子供たちに必要となるのは，いかに社会が変化しようと，自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力である。また，自らを律しつつ，他人とともに協調し，他人を思いやる心や感動する心など，豊かな人間性である」と表現されている。

学校に期待される役割は，学習指導要領に記述された必要十分とされる内容を子どもたちに「伝え授ける」のではなく，各教科内容の基礎・基本

の徹底習得を図りながら，学習への関心・意欲・態度を育て，生きて働く力を育成することへと広がりをもってきた。2000年度から実施される新しい学習指導要領では小・中学校で総合的学習の時間が設定された。そこでは個々の教科の学習を踏まえて統合的な学力形成を図ることが期待されている。現代的な課題を中心的な題材とし，学習の方法・態度，学習に必要な情報の収集と選択の技能，さらには学習内容を発信する力までも指導の目標としている。

個々の教科でも，単なる知識の習得を目標としていたのでは，教科指導本来のねらいを達成することはできない。教科はそこでの内容そのものを習得することが必ずしも目的ではない。その教科で扱う教材を用いて学習の方法や底に流れる原理を学ぶことに意義がある場合が多い。したがって習得を促進する教材や指導法の工夫という観点よりは，原理や方法の学習に近づくための教材や指導法の工夫をするという観点が必要となる。また学習の過程そのものが重要な経験となるのであるから，生徒の学習方法も視野に入れた指導の新たな工夫が必要となる。

本研究では，高校保健科，単元「環境と健康」(注1) での，新しい学力形成をめざした学習指導モデルの実践的試みを，その結果とあわせて報告する。このモデルは次の特徴をもつ。

①協同学習の原理（杉江　1999）を基本に置き，学級の生徒が相互作用を通して学習を深め，ともに育つという目標をもちつつ，各個が主体的に学習することを可能にする。

②保健科担当教師と学校司書との協力によって，生徒の求める資料を容易かつ豊富に提供できる条件を作り，合わせて情報の収集と処理に関する豊かな同時学習も促す。

このように協同学習にティームティーチングを導入することで，生徒の協同的，主体的学習を保障するための情報の提供と学習の取り組み方への教師からの適切な援助が可能となる。ティームティーチングにありがちな，個別学習と指導の徹底という指導パターン（それは教材によっては有効であるが，一方，主体的学習態度や社会的技能などの同時学習がもたらされないことになる）を解消する手立てともなる。なお，このような授業を効

果的に行なうためには次のような配慮が必要となる。

①生徒の自主的学習がなされるために，あらかじめかれらの中に適切な水準の基礎的知識・情報が取り入れられている必要がある。

②協同の意義と方法を，生徒が理解している必要がある。

③単元を単位とした学習指導計画を，ティームを組む教師が間違いなく共通理解している必要がある。

④主体的な活動ができるように，単元単位での学習内容と最終的な目標について，生徒が十分理解し，学習の方向づけを彼ら自身で行なっている必要がある。

主体的学習を標榜する実践でしばしば見られる問題点は，教師の介入をなくすることが主体的学習の条件と考えている場合が多いことである。その結果生徒は乏しい経験だけに基づいて試行錯誤を重ね，貧弱な成果しか出すことができないということになる。学習過程が自由であったということに対しては積極的な感想をもつかもしれないが，最終的な成果が平凡なものであったならば，学習への継続的な関心，意欲がかきたてられることはないだろう。学習過程は生徒の主体性に任せるとしても，そのための準備を十分に施しておくのが教師の仕事である。

また，協同学習は単に小集団を組みさえすれば成立するという安易な実践も目立つ。協同学習を成功的に進めるには指導者が協同学習の方法を十分理解していなくてはいけない。協同学習は容易ではないのである(Johnson, Johnson, & Holubec　1984)。とりわけ重要なのは，協同して取り組む課題が明確であるかどうかであり，生徒が課題を明確に認識できるような働き掛けを工夫しなければならない。教師相互も課題についての十分な共通理解が必要となることは当然である。

授業モデル

このモデルを導入した授業では，「健康な環境」というメイン・テーマのもとに，個々の生徒が自分自身の関心に基づいてサブ・テーマを設定し，小論文を書き上げることが目標である。さらに個別の学習成果を学級で交

換することで環境についての認識を広げ深めることをめざす。

すなわち，環境についての個別の知識，理解を深め，環境問題への望ましい態度形成を図るとともに，情報の収集と統合，発信の技能を同時学習させようというものである。さらに，学級内の協同を通して課題志向的な場面での社会的技能を育成するねらいもある。

環境というテーマは，確かな知識を踏まえて，生徒がどのようにその問題に対処すべきか，考え，態度を作っていくことが求められる題材である。そこでは，個人の考えを鍛え，練り上げる場が必要であり，協同的小集団を積極的に活用する意味は大きい。

教師のティームはベテランと若手で組んだ保健科担当教師2名と学校司書1名の3人である。通常のティームティーチングの形（すなわち同一教科担当者2名という形）に学校司書が加わっている。教師ティーム3人のメンバー相互の単元単位での指導目標と指導過程についての共通理解を図ることがここでは不可欠である。

事例は高校1年生，37人と39人の2クラスをそれぞれ対象とした。期間は2000年12月～2001年3月。

10時間で構成した単元は次の形ですすめた。なお，授業は1，2時間目（導入）と9，10時間目（まとめ）は教室で，3～8時間目（展開）は図書館で行なった。

＜導入＞：基礎知識・技能の定着と学習の見通しづくり及び各教師の専門を生かした講義

第1時間目：協同学習の意義と方法について解説をする。単元全体の学習スケジュールを伝え，学習のすすめ方と最終的なゴール，すなわち小論文の作成という課題について説明し，生徒の理解を図る。ここでは生徒との問答をはさみながら教師による一斉指導を用いる。最後に，2時間目以降に必要な基礎知識をあらかじめ習得させるべく宿題を出す。教師は3人共に教室に出席する。

第2時間目：プリ・テストを行ない，事前学習の定着度を測る。次いで小論文の書き方の指導を行なう。さらに，学校司書から図書館利用の方法

について，インターネットの活用法などをあわせた講義を実施する（使用したパンフレットは資料として論文末に示す）。
その後，サブ・テーマが類似する者同士で小集団を編成。小集団は生徒相互の話し合いで決定する(注2)。

＜展開＞：情報の収集と統合。各教師の専門を生かした援助

第3時間目：サブ・テーマの確定と研究計画の作成。保健科担当教師が本時の目標を説明，小集団ごとに各メンバーのテーマと計画を検討する。図書館資料を活用する。資料の検索方法は学校司書が対応。保健科教師2名は生徒の質問に対応。

第4時間目：資料収集。個別の活動が基本となるが，グループ・メンバー同士での資料の交換や収集の分担などもおこなう。

第5時間目：第1回の論文ドラフトを作成，授業後に教師に提出。出されたドラフトは次時までに教師がコメントを付けて返却する。

第6時間目：指摘された課題に答え，修正を加えるための資料収集と原稿の修正作業。

第7時間目：第2回の論文ドラフトを作成，授業後に教師に提出。これも次時までに教師がコメントを付けて返却する。

第8時間目：論文の完成。提出。

＜まとめ＞：評価と講評

第9時間目：ポスト・テストの実施。内容は知識の習得を測るものと，自身の論文の要約，さらに，授業過程の感想を謝辞の形で書かせたもの。

第10時間目：提出された小論文に対する教師の講評と，単元の学習内容のまとめを教師主導の一斉形態で行なう。

なお，第10時間目の前に小論文にまとめた内容を各個にプレゼンテーションする時間が本来必要である。今回はそれができなかったため，提出された小論文を冊子にまとめ配布することとした。次善の対応である。

実践の経過

上記のモデルを踏まえた今回の実践では次のような経過をたどった。

まずティームティーチングであることから，教師ティームが単元単位での指導内容に関する共通理解を図ること，分担を決めることという2つの要件を果たさなくてはならない。今回は2ヵ月の間に3回の打ち合せを行なった。また保健科教師はベテランと経験1年目の若い教師であったため，ベテラン教師が基本的にはメインの活動を行ない，若手教師が補助的な役割を持つことになった。

第1時間目：ベテラン保健科教師がメインとなって授業を進める。なお，以降の学習に必要な基本的知識を保障するために，環境問題理解のためのキーワードを教科書から抜き出し，その意味を調べてノートに書くという作業を宿題として課した（ノートの提出を求める）。その宿題の以後の学習に対する必要性についても説明する。未提出の場合もかならず後で提出させる旨の教示を徹底した。

第2時間目：2時間目のはじめにノートを提出させ，その後テストを行なった。主要な用語の7割程度は理解されていることが確認され，不十分な部分は学習の過程で徹底して習得することを指示した。また，小論文の書き方についてはプリントを配布し，資料とした（海老澤栄一　1996　を参考とした）。司書の解説の後に生徒が作った小集団のサイズは2〜8人となった。

第3時間目：毎時開始時には本時のめあてを保健科教師が確認する。この3時間目は生徒がどの小集団に所属するかで迷いが多く，その指導を多く求められた。すなわちテーマの内容で集まるか，方法で集まるか，または仲良しで集まるかというような点で生徒が助言を求めることが多くみられた。

第4時間目：小集団でまとまって活動するケースが多くみられた。討議を重ねているグループ，閲覧室に入り浸るグループなどが目に付いた。また教師に対しては，ひとつのテーマについて研究を分担し，グループでシ

リーズにしてもよいかとか，調査者，ワープロによる入力者などの役割分担をしてもよいかといった質問がみられた。

第5時間目：論文ドラフト作成のステップであったが，この時点では生徒に戸惑いが多く，成果をまとめるにいたる者は多くはなかった。論文の体裁をなさず，指導がおおいに必要であった。時間内に作成することが難しく，未提出が6割あった。

第6時間目：前述の理由から必然的にコメントは辛口のものとなった。前時未提出の者も含めて教師の要求水準の高さを察知し，情報収集にさらに積極的となり，3名の教師への質問が多くなされるようになった。

第7，8時間目：完成に向けて一気に学習への熱は高まり，授業時間をこえてグループでの活動や個人的な情報収集が積極的に行なわれた。他の学級の仲間に助言を求めたり，海外に赴任中の父親にインターネットを通じて問い合わせをしたりなどという事例もみることができた。

第9時間目：ポストテストは期末テストとして実施した。

第10時間目：期末テスト返却時にこの指導を行なった。

実践の成果と課題

生徒全員が 2,000字程度の小論文を提出した。テーマは環境ホルモン，地球温暖化，森林破壊，水質汚染といった基本的問題理解から，リサイクル，ハイブリッド車，安全な食品といった問題解決的対応に関するものまで多様であり，2クラス80名の小論文のテーマは教科書の内容をほぼ覆い，さらに広がりをもつものであった(注3)。

ポスト・テストで述べられた謝辞の相手については，仲間および，メインとサブの保健科教師と学校司書を名指しした生徒がそれぞれ20%以上見られた。仲間との相互作用の積極的評価，またティームを組んだ教師それぞれに対する好意的評価がそこに見られる(注4)。

モデルの実施可能性に主眼を置いた試行的研究であるため，効果を客観的に押さえる指標には乏しいが，3人の教師それぞれが，通常の一斉講義方式に比べて，生徒の学習参加度が高いという印象をもち，小論文の質も

全体に満足のいくものであった。

なお，プレゼンテーションの工夫，協同のさせ方などがこのモデルを実践に移す場合の今後の課題として考えられた。

保健科担当教師（ベテラン）の実践後の感想は次のとおりである。

「当初は戸惑いを見せながらも，教師の予想を越えて生徒たちは大きなエネルギーを学習に注いでいたという印象である。生徒たちの満足度もかなり高いことをうかがわせる反応を得ており，同学年の他のクラスで，担当者が違うクラスの生徒からは『なぜ私たちのクラスではあのような授業をしてもらえないのか』というような羨ましがる反応がでていた。また授業参加者の中には，国語科で入試対策として行なっている小論文の書き方指導に対して，あれは本物ではないというような感想を言う者がおり，国語科にちょっと申し訳ないような気がした。総合的学習の時間の実施が目前であることに鑑みて、楽しく，生徒の生きる力につながる活動をうかがうことができたが，一方で進学校で受験科目でない，できれば寝ていたいはずの時間の教科がエネルギッシュに動き回るのはどうかというような批判がなくはなく，大々的なプレゼンテーションの機会設定ができなかったことが心残りである。」

学校司書の実践後の感想は次のとおりであった。

「生徒は自分の研究したいテーマに必要な資料を探す（①本校図書館の検索機で本校図書館の本を探す，②事典・辞典や一般書の巻末索引等で必要なページを探す）とき，キーワードの設定が苦手で，ヒットする本，あるいは項目がないと同意語や上位概念，下位概念のことばを設定して探そうとせず，あきらめてしまう傾向にある。概念の構築ができていないというよりはボキャブラリーの不足が原因だと感じたが，ヒントを与えたり慣れてくると探すようになる。

インターネットで検索する場合は，情報やことばの種類，量が圧倒的に多いためヒットしやすいのだが，インターネットを利用する生徒は限

られていて，ほとんどの生徒が本を使ったのは意外であった。

生徒の発想の豊かさにはいつも驚かされる。同様の学習を行なうとき，学校によっては授業を担当する教師の指示で，あるいは図書館独自に必要と思われる資料を集めたコーナーを設置するところが多いのだが，本校ではしていない。生徒はこちらが思いもよらないテーマを設定したり，思いがけない方法でテーマへのアプローチを図ったり，こちらがまったく気づかなかった資料を探しだしてきたりするので，司書として非常に勉強にもなるしおもしろい。コーナーを設置しないのはコーナーによってそういう生徒の豊かな発想が妨げられたり限定されてしまうのではないかと考えるからである。」

（受理日　平成13年10月3日）

（注1）「環境と健康」という単元の内容は，この実践で用いたテキスト『新高等保健体育』（大修館書店　1999）では次のような構成になっている。

1. 環境の汚染と健康
   1. 大気汚染と健康被害／2. 水質汚染と健康被害／3. 土壌汚染と健康被害／4. 健康被害の防止／5. 産業廃棄物の処理
2. 環境の調和と健康
   1. 生存と健康を支える自然環境／2. 自然環境の保全

なお，「環境」単元を扱うにあたっては四日市市に位置する本実践校としては留意が必要なところがある。四日市喘息に関連して，その患者（被害者）の家族，会社側の家族，さらに評価者の家族（環境研究所，役所関係，各側の応援団体等）の一員である生徒が一定数在籍している。彼らの「環境問題」に関する知識，理解は一方に偏ってなおかつ豊富である可能性が高い。一方，教科書の内容はその多くが最新のものではなく，指導する教師も先端の環境問題の専門家ではない。そのような教育状況の中で教科書中心の講義を行なっても学習者の要求に応えることは難しく，また，生徒相互の討議に重点を置いた授業を行なってもそこに深まりを作り出すことには困難が予想される。このような事情はこの単元での今回の授業設計の発想の背景のひとつになっている。

（注2）指導者は，小集団の活用については生徒個々の成長の手段として考えており，また生徒を動機づける協同的学級集団づくりを目標と考えた。そのような活動経験をもって，さらに外の集団に対しても積極的に働き掛ける態度

の形成も大切なことと考えた。

今回の実践では気心の知れた者同士でまず集まって着席し，その後各個のテーマが明らかになる過程でテーマが似た者同士が座席を替わって集まるという形の小集団編成をした。したがってサイズは決まっておらず，時間ごとにメンバーの入れ替わりも可能とした。この形態は「自由バズ」（市川1987）の手続きに基づいている。

（注3）次の内容が選ばれた。類似のものはまとめて（　）内に数を示す。

環境ホルモン（4）	水	リサイクル
シックハウス（2）	農薬	紙
食品アレルギー	洗剤	電化製品
花粉症	海洋汚染	携帯電話（2）
ハイブリッドカー・排気ガス（6）	海苔	消費者意識
原子力	マナティ	人口
遺伝子組み替え食品（2）	絶滅危惧動物（2）	色彩心理
食品添加物（3）	競争馬（2）	精神健康
食文化	異常気象	音楽療法
アロエ	酸性雨（2）	鬱病
薬草・ハーブ（2）	森林破壊（3）	嘘
お茶	森林の効用（2）	聴覚障害者
大気汚染	地震	
水質汚染（2）	ごみ（6）	

（注4）80人の生徒からのデータでは次の対象への謝辞がみられた。感謝の内容も記す。数値は人数。複数回答あり。

＜級友＞		＜保健科若手教師＞	
論文作成上の助言	14	学習の相談にのった	10
資料，情報提供	13	研究活動の援助	9
研究方法の助言	10	ベテラン教師の指導の解説	9
教師の指導内容の確認相手	9	＜学校司書＞	
議論の相手	9	本の提供	13
資料検索の助力	8	資料の検索援助	13
楽しく過ごせた	8	機器操作の指導	6
助言者・協力者の紹介	6	＜外部の司書＞	

機器操作の援助	3	資料の提供	3
＜学校外の友人＞			
資料・情報提供	2		
＜保健科ベテラン教師＞			
論文作成指導	17		
添削指導	13		
研究の着想アドバイス	12		
楽しい授業の提供	11		

文　献

海老澤栄一　1996　小論文の設計　同友館

市川千秋　1987　自由バズを取り入れた授業の進め方　明治図書

Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. 1984 *Circles of Learning: Cooperation in Classroom.* Interaction Book.（杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤訳　1998　学習の輪－アメリカの協同学習入門　二瓶社）

杉江修治　1999　バズ学習の研究　風間書房

資料：「テーマの探し方・資料の探し方」（学校司書使用資料）

調べてみよう！　健康な環境　－テーマの探し方・資料の探し方－

ひとくちに「健康」「環境」といっても
さまざまなテーマが含まれます。
どんなテーマがあるのか
どんな資料を見ればいいのか
調べ方を案内します。

書名のあとの（　）内の数字は，その本が図書館のどこにあるのかを示しています。

テーマに迷ったとき，テーマのアウトラインを知りたいときには事典や用語集が便利

百科事典はカウンター前の本棚に並んでいます。ちょっと面倒でも，まず“健康”“環境”等のキーワードで索引を引いてみましょう。より確実に目的のページにたどりつけるばかりでなく，別のキーワードを見つけることもできます。

『世界大百科事典』(031)『日本大百科事典」(031)『万有百科大辞典』(031)

新しいテーマには時事用語集が適しています。西側の本棚に並んでいますが，1988年以前のものは書庫にありますので，利用したい人は申し出てください。用語集にも巻末等に索引がついています。また目次を見れば，どこに自分の知りたいことがらが載っているかがわかります。

『朝日キーワード』(031)『時事ニュースワイド』(031)『データパル』(031)『イミダス』(031)『現代用語の基礎知識』(031)　『知恵蔵』(031)

本からテーマを見つけるには……

一般の本は，主題にしたがって《日本十進分類法》で分類番号をつけ，0から9まで順番に本棚に並んでいます。番号の上に“B”の記号がついているものは文庫で，文庫の棚に並んでいます。

「健康な環境」にはどのようなテーマがあるのか，ヒントになりそうな本をいくつか紹介しましょう。

分類番号	書　　名	著　者
374.9	心の健康教育	山崎勝之
498.3	たばこは全身病	
518.5	ごみがつくる生活美学	
518.5	ごみからまちづくり	
519	ダイオキシン汚染	青山貞一
519	わが手ですばらしい大地を	日本環境協会
519.04	高校生が考えた「地域と環境」	池田武邦
519.4	きれいな水をとりもどすために	小倉紀雄

ここに紹介した本は一部です。同じ分類番号の場所へ行くともっと多くの「健康」「環境」関係の本がみつかります。目次や索引を利用して，探したいテーマに効率よくたどりつきましょう。

また，巻末に文献目録がついている本もあります。その中に読みたい本がある場合は，できるだけ提供するようにしますので，司書に相談してください。

コンピュータ（検索機）に“ケンコウ”や“カンキョウ”と入力すれば，関係の本の一覧が出てきます。その他，いろいろなキーワードを見つけて検索してみましょう。

ブックリストも使いましょう

カウンターに置いてあります。読みたい本を見つけたら，分類番号を見て本棚へ行ってください。

深く掘り下げるには年鑑，白書も参考に！

1年間のトピックやデータをまとめたものが年鑑・白書類です。1997年以前のものは書庫にありますので，利用したい人は申し出てください。

『朝日年鑑』(059)『日本の論点』(304)『世界国勢図会』(350.8)『日本国勢図会』(351)『データでみる県政』(351)『青少年白書』(367.6)『理科年表』(403.6)『図でみる環境白書』(519.04)『環境白書』(519.1)『地球白書』(519.8)

雑誌の記事も役立ちます

雑誌は西側の雑誌架に並んでいます。「健康」や「環境」について特集を組んだのが次の雑誌です。ほかにも探してみましょう。バックナンバーを見たいときは，司書に申し出てください。

『オレンジページ』『サイアス』『週間金曜日』『ニューズウイーク』『ニュートン』

四日市市と三重県の広報もあります。市や県の様子を知るための資料として活用してください。

『広報よっかいち』『県政だより　みえ』

新聞は一番ホットな情報源

今週の分は雑誌架の横に架けてあります。それ以前のもの（最近1年分）は書庫にあります。

『朝日新聞』『毎日新聞』『中日新聞』『中日スポーツ』『MAINICHI Daily News』

朝日新聞については，紙面をそのまま縮小して一ヵ月ごとにまとめた「縮刷版」があります。西側の棚に並んでいますが，索引が引きにくいので，わからない場合は司書にたずねてください。1997年以前のものは書庫にあります。

『朝日新聞縮刷版』(071)

また，“健康教育”や“科学”関係の記事だけを集めた「切り抜き速報」もあります。1998年以前のものは書庫です。

『切り抜き速報科学版』(405)『切り抜き速報健康教育版』(498.7)

調べたいテーマの記事が，いつどこで掲載されたかを知りたいときは，新聞社や三重県立図書館にデータベース検索を依頼することもできます。利用したい人は司書まで申し出てください。

インターネットをうまく使って……

閲覧室に1台，司書室に1台，インターネットが利用できるコンピュータがあります。使い方がわからない人は，先生や司書に聞いてください。

インターネットは手軽に情報を発信したり，受け取ったりできる便利なものです。が，逆にいえば，それだけ曖昧な情報や，いいかげんな情報が多いということです。

インターネットに限らず，情報をより確かなものにするためには，1つの情報を鵜呑みにするのではなく，いくつかを比較し，検討することが必要です。

図書目録ってなに？

南高図書館にない本を調べることができます。カウンターの後の棚にありますので，利用したい人は申し出てください。

『日本書籍総目録 1997』　……1996 現在，発行されている本が載っています。

『ブックページ　本の年鑑』……前年に発行された本と簡単な内容が載っています。
1997 年以前のものは司書室にあります。

外部の図書館も利用しよう

他校の図書館や公共図書館の資料を利用したいときは，司書に相談してください。南高図書館へ借りてきたり，送ってもらうこともできます。

公共図書館に自分で足を運ぶのも勉強になりますよ。

◆四日市市立図書館（〒510-0821 四日市市久保田1丁目2-42 TEL.52-5108）

開館時間：火・水・木・金曜日……9時30分～19時
　　土・日曜日，祝日……9時30分～17時

休 館 日：毎週月曜日，毎月第2・第4火曜日，特別整理期間，年末年始

◆あさけプラザ図書館（〒510-8028 四日市市下之宮町296-1 TEL.63-0102）

開館時間：9時～17時

休　　日：毎週月曜日，毎月第2火曜日，特別整理期間，年末年始

◆四日市市環境学習センター（四日市市本町9-8　TEL.54-8430）

開館時間：9時～17時

休 館 日：毎週日・月曜日，祝日，年末年始

図書館の本を無断でコピーすることは法律で固く禁じられています。コピーが必要な場合は，その本を所蔵する図書館まで，かならず申し出てください。

その他わからないことがあったら，何でも気軽に，係までどーぞ！

注意！　本の文章等を勝手に引用することも，法律で固く禁じられています。下記の項目に注意して，チェックしながらレポートを書きましょう。

①調べた本の書名と著者名をメモしましたか？……□
②調べた本の出版社と発行年をメモしましたか？……□
③調べた本のどこに載っていたか，ページをメモしましたか？……□
④見学や聞き取りを行なった場合，その年月日を書きましたか？……□
⑤写真や図表をコピーしたり写したりした場合，その出典（書名，著者名，出版社，発行年）を書きましたか？……□
⑥まとめるために使った本を，参考資料として挙げましたか？（参考資料の欄をつくり，書名，著者名，出版社，発行年を書く）……□

参考資料：『ツールブック　実践・調べ学習　基本と応用』「読書の科学」事務局編（図書館流通センター　1996）

2001年1月

四日市南高等学校図書館